

## 家族のミライ・ミライの家族 The Future of the Family, the Family of the Future

---

原 俊彦（札幌市立大学・名誉教授）

Toshihiko HARA (Sapporo City University, professor emeritus,  
Sapporo Japan) Email: t.hara@scu.ac.jp

第32回日本家族社会学会大会 日本女子大学（目白キャンパス）

第2日目 9月4日（日）9:15~10:45

⑤家族とは何か（香雪館 204 教室） 司会 野田潤（東洋英和女学院大学）

1

### RQ: 家族のミライ・ミライの家族

---

- ここでは、三編の現代小説を取り上げ、そこに描かれた家族のミライについて考察する。
    - 『百年法』（山田宗樹 2012）平均寿命の延伸、超長寿化の進行は家族をどう変えるか？
    - 『LOVE&SYSTEMS』（中島たい子 2012）晩婚・晩産化、非婚化の進行は家族をどう変えるか？
    - 『消滅世界』（村田沙耶香 2015）生殖・出産・子育ての分離・分業化は家族をどう変えるか？
  - これらの家族のミライにリアリティはあるのだろうか？。
  - 家族の社会化が進むとすればミライの家族はどのようなものになるのか？
-

## 1. 現代小説にみる家族のミライ

---

3

### 百年法（上）（下）

---

- [山田 宗樹](#) 角川書店(角川グループパブリッシング)  
(2012/7/28)
- 不老不死の実現
- 不老技術“HAVI”処置後100年で安楽死を義務付け
- 法律“生存制限法”



## 百年法の世界では

- 家族の構成員間(祖父母・親・きょうだいなど)の年齢差が事実上意味を失う(“HAVI”処置を受けた年齢で老化が止まり、不死となる)。
- 家族の構成員間の役割関係が曖昧となり、家族のきづなは弱まる。
- 結婚・出産などに向かうパートナー関係の形成が難しくなる。逆に離婚など、家族関係の解体が進む。
- 出生・死亡による家族の再生産が阻害される。

。

## LOVE&SYSTEMS

□ [中島 たい子 \(著\)](#)

□ 幻冬舎 (2012/8/24)

- A. 結婚の国家管理→指定された家族(同じ苗字)の一員としての個人、夫、妻、長男長女などの役割を担う(日本をイメージ)。
- B. 結婚制度の廃止→子育ての社会化(フランスをイメージ)



## 『LOVE&SYSTEMS』の世界では

- A. 結婚の国家管理が進み、国家がパートナー選択を行い家族形成を促す。⇒家族は社会から指定された公的關係であり、個人は家族の中で社会的役割を果たす。社会から距離をおいた親密圏としての家族は消滅している。
- B. 結婚制度が廃止され子育てが全面的に社会化する⇒公的には家族關係は存在せず、非公式なパートナー關係や親子關係がある。公的には家族は消滅している。

## 『消滅世界』

- 村田沙耶香(著)
- 河出書房新社 2015年12月
- 「セックス」も「家族」も、世界から消える。日本の未来を予言する圧倒的衝撃作(アマゾンのキャッチコピー)



## 『消滅世界』では

---

- セックスと生殖は完全に分離されている。
- セックスは異性間・同性間・多人数間など多様化しており、基本的に生殖とは関係のない性的行為となっている。
- 生殖は人工的に行われ、受精した卵子は第三者により受胎され出産される(男性も可能)。
- 誕生した子どもは社会的に保育・養育され、すべての市民の子ども＝社会の子どもとなる。
- 個人をベースとした家族は消滅する。

## 2. 超高齢・人口減少に向かう世界

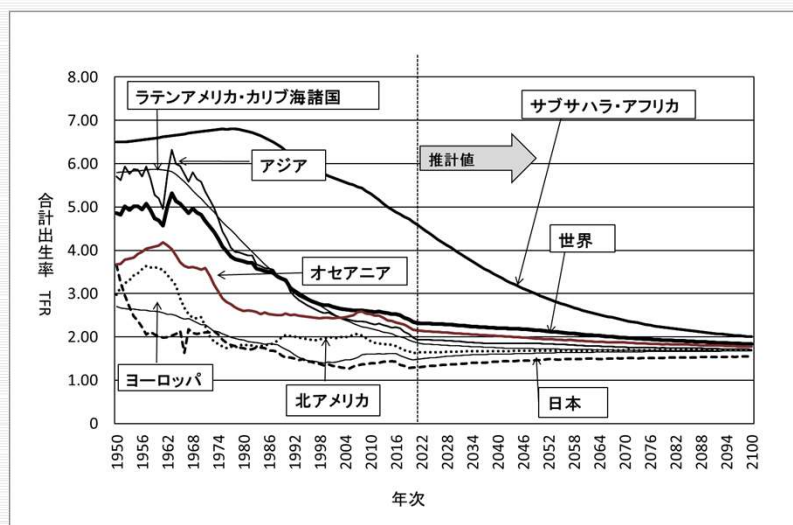
---

## 少子化の進行

- 実は、世界の多くの地域では、日本同様、すでに少子・高齢化が進んでおり、高齢者は再生産しないことを考えれば、遠からず人口減少に入ることが理解できる。
- 国連の推計(WPP22)によれば、世界全体の出生力(合計出生率:TFR)はピーク時(1963年)の5.32から2022年現在の2.31まで低下、2060年には2.06と置換水準を切り、2100年には1.84となる(図3)
- すでに世界の3分の2以上の国々で出生力(合計出生率:TFR)は置換水準(2.1人)以下となり(United Nations 2022b)、低出生力は日本の専売特許ではなくなっている。東アジアの韓国、台湾、シンガポール、香港などでは低下に歯止めが掛からず、一人っ子政策を放棄した中国でも出生力の低下は止まらず、コロナ危機の影響もあり、早くも2022年には人口減少に入るのはではないかといわれている。

11

図1: 合計出生率(TFR)の変化(地域別)



12

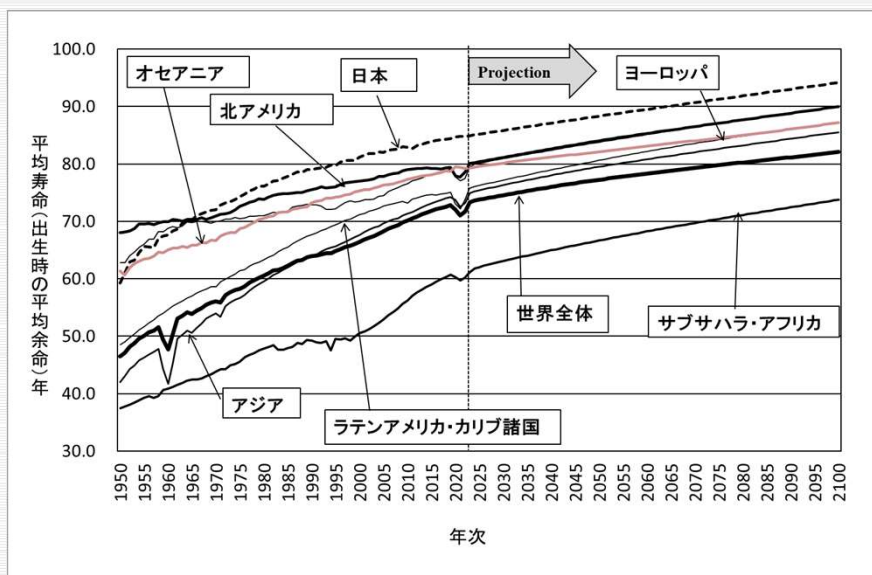
資料: United Nations (2022a)より作図。

## 高齢化の進行・長期の人口減少

- 世界全体の平均寿命は1950年の46.5歳から2022年現在の71.7歳を経て2100年には82.1歳まで延伸(図2)。日本は 59.2歳から84.8歳を経て93.2歳、最も遅いサブサハラ・アフリカでも 37.5歳から60.2歳を経て73.8歳と現在の先進国に近い水準に達するとされている。
- 世界全体の純再生産率(NRR)も1950年の1.64から 2022年現在の1.06を経て2055年には0.99と置換水準(1.00)以下となり、2100年には0.88まで低下する。(図3) 2022年現在でもすでにサブサハラ・アフリカ(1.94)とオセアニア(1.01)以外は置換水準以下となっている。
- 世界人口は多産多死から少産少死へと向かう人口転換の歴史的プロセスを終え、長期の人口減少期に向かっている。出生力が置換水準以下に留まり続ければ世界人口は300年程で消滅する(原2021)。

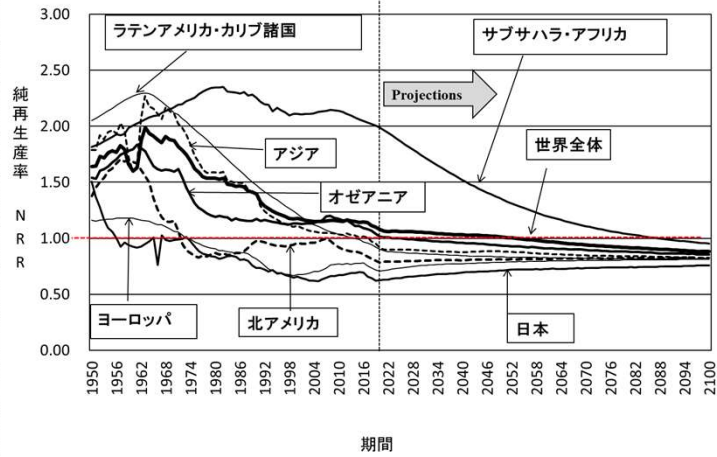
13

図2: 平均寿命の変化(地域別)



資料: United Nations (2022a)より作図

図5 世界人口の地域別純再生産率(NRR)



資料 : United Nations (2022) より作図

### 3. 政策面から展望する家族のミライ



## 超長寿化・超高齢化への対応

- 寿命の社会的管理については、現在のところ平均寿命の延伸を抑えるような政策的対応はない。
- しかし、平均寿命90歳・高齢化率40%という避けがたい未来を想定した場合、世代交代の遅延やライフサイクルの延伸が進むことは避け難い。
- 従来の高齢者福祉制度のスキーム(世代間扶養)に代わり、世代や年齢の枠を超えた個人ベースの労働・所得・税・福祉サービスの再分配システムを構築する必要がある。
- 長期的には、世代間・相互扶養の単位としての家族は存在理由を失って行くだらう。

17

## 非婚化への対応・家族形成支援

- 結婚の社会的管理については、法的な婚姻制度という形ではすでに存在するが極端な介入や国家管理化は行われていない。ワークライフバランスの改善、ジェンダー平等の推進、正規・非正規の雇用格差の是正、保育・教育の無償化などの家族形成支援策が行われている。
- しかし、個人が希望するタイミングで相互に納得の行くパートナーに巡り会い、結婚・出産し幸せに暮らしてゆくことは容易ではない。パートナー選択に必要な情報を政府がビッグデータとして一元管理し、AI など通じ提供するようになる可能性はある。当初は情報提供に過ぎないとしても、システムに対する依存性が高まれば結婚はもとより結婚後の生活も政府が支援・管理するようになるだろう。

18

## 少子化への対応・出産・子育て支援

---

- 生殖・出産・子育ての社会的管理については、急速に発展し始めた生殖補助医療(ART)がさらに普及し高年齢出産の安全性が保証されるとともに、出生間隔の短縮(多胎児出産, 代理母出産, 人工胎盤の利用)も可能となるだろう。
- 卵子の冷凍保存・解凍・体外受精などの利用が一般化すれば、出生タイミングをライフコース上の任意の時点(未来)にシフトさせることも考えられる。
- このような社会では『セックス』は必要とされず、むしろ忌避されるとともに再生産の基本単位としての家族は意味を失うだろう。

---

19

## 4. ミライの家族はどのようなものになるのか？

---

20

## ミライの家族

- このような社会では、我々が知っている意味での家族は消滅し、社会と個人が直接繋がる社会システムとなるだろう。
- 個人の生産・再生産は社会全体の中で完全に、組織化・分業化される。それはこれまでの人類社会よりは蟻や蜂などの社会性昆虫に近いものとなり、現時点からみれば奇怪で全体主義的な印象を免れない。
- しかし個人の自由を可能な限り保障する方向で進化し、やがて社会全体が1つの巨大な家族になると考えれば、これがミライの家族の姿なのではないかと思う。

21

## 参考文献・資料

原 俊彦 (はら としひこ) 札幌市立大学 (名誉教授)  
連絡先 (自宅) : 〒007-0834 札幌市東区北34条東19丁目3-7  
電話 090-2077-6027 E-mail : t.hara@scu.ac.jp,  
<http://toshi-hara.jp>

- 中島たい子(2012)『LOVE&SYSTEMS』幻冬舎
- 原 俊彦(2021)「縮減に向かう世界人口—持続可能性への展望を探る」特集サピエンス減少—人類史の折り返し点、『世界』第947号, 2021年8月、pp.86-99
- 村田沙耶香(2015)『消滅世界』河出書房新社
- 山田宗樹(2012)『百年法(上)(下)』角川書店
- Hara,T(2020) An Essay on the Principle of Sustainable Population, in Series: SpringerBriefs in Population Studies Subseries: Population Studies of Japan, Springer
- Hara,T(2022) “Chapter 35: Demographic Sustainability”. in John F. May, Jack A. Goldstone (Ed.) International Handbook of Population Policies, Springer
- United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division (2022a) World Population Prospects 2022 [Database].  
<https://population.un.org/wpp/>
- United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division (2022b). World Population Prospects 2022: Summary of Results. UN DESA/POP/2022/TR/NO. 3.

22